

第六回 平成二十六(二〇一四)年十月十八日

「西宮雅楽多宗」の人々(二) 戦後編―趣味と世相批判、そして後継者―

山内 英正 (やまうち・ひでまさ)

はじめに

私と「西宮雅楽多宗」の出会い、京都の古書店「書林かみかわ」からいただいた趣味人ゆかりの戦前・戦後の写真のなかに、雅楽多宗に関連する主として戦前の写真を見つけたことに始まります。しかも「白鹿記念酒造博物館」が西宮市から寄託されている「笹部桜コレクション」のなかに、雅楽多宗が戦後に再開した例会案内の葉書があったので、両者が結びついて戦前・戦後の活動が判明していったのです。

笹部新太郎は雅楽多宗の宗員ではありませんでした。浅田耕一郎(雅号、柳一)と懇意になり、時折、例会に参加しています。桜に関わる野外見学会では、その場で説明役も果たしています。酒造博物館にある案内葉書のうち、笹部宛の表書きがあるもので、年代が最も古いものは昭和二十四(一九四九)年八月二十一日に、西宮の浄願寺で催された「納涼交換会」の案内です。笹部は洒落つけのある風刺、そしてどこか洒脱な案内状が気に入り、浅田にバックナンバを求めました。浅田は手元に余分があるものは、笹部に寄贈したと伝えられています。表書きが無いものは、一括して笹部の許に寄贈されたもので

しよう。したがって、博物館にある案内葉書が戦後の雅楽多宗の活動のすべてを物語っていると断言できません。因みに笹部桜コレクションの雅楽多宗関係の葉書には複数同じ物がありますが、それらを一種類とすると、種類総数は百三十葉もあります。

笹部と浅田との交流を物語る興味深い資料が、笹部桜コレクションのなかにあります。博物館で時々展示されていますので、御覧ください。それは雅楽多宗の宗員、小松原無庵が描いた「大阪寺町を歩く僕と浅田柳一君の後姿」の額に入れられた小さな絵（二一・二×一六・七センチメートル）です。「笹部博士」と「浅田先生」が二人並んで歩く後姿で、蒐集品を示す桜と軒丸瓦の文様が名前の下に小さく描かれています。そして「大阪寺町をテクルの図 昭和二十七年五月五日」と記されています。弾正原佐和学芸員の御教示によれば、笹部のポケット日記の昭和二十七年五月五日の項目には「大阪芸文協会主催」、「隆専寺↓道頓堀」の記述があります。隆専寺は現、大阪市天王寺区生玉町五・四にあり、大正時代まではイトザクラ、現在はソメイヨシノで有名な「桜の寺」です。境内には甲陽学院所蔵の瓦・土器のコレクションを蒐集した三宅吉之助などが加わっていた、「浪華面茶会」（自作玩具や郷土玩具の見せ合い談義会）が昭和八年に建立した「面茶」塚があります。この会は隆専寺で「観桜面茶会」を催しました。言わば趣味人好みの会場の一つです。端午の節句の五月五日が雅楽多宗の結成日であるので、浅田や小松原は心躍るものがあったことでしょう。笹部のポケット日記を丹念に読み解くと、笹部の雅楽多宗員との交流や例会参加の内容がより明確になると思います。

浅田は、笹部が揮毫した吉野の「頌桜碑」（昭和四十年）の建立にも尽力しています。この碑は吉野の

老人広場の奥に建立されており、碑の後ろにササベザクラが植えられています。

酒造博物館に寄託されている堀内冷戎コレクシヨンのなかにも、堀内が蒐集した雅楽多宗の案内葉書が一部あります。堀内は直接雅楽多宗に関わっていませんが、西宮ゆかりの物として蒐集したのです。前置きが長くなりましたが、戦後の雅楽多宗の本論に入りましょう。

一、蒐集品の展覧会

雅楽多宗は戦前、各自の趣味の蒐集品を展示して楽しむ会として活動してきましたが、宝物展覧会は第七回の昭和十一年（一九三六）十月十一日をもって中断し、甲子展は第十四回の昭和十九（一九四四）年四月三十日をもって中断しました。浅田は昭和二十一（一九四六）年になると雅楽多宗の活動を再開し、住職会議（例会）を毎月開催して、宗員たちは宝物展覧会や甲子展を復活させていきました（追記（1）参照）。

（一） 宝物展覧会

戦後最初の宝物展覧会は、昭和二十一年五月五日、「戦災趣味品追憶祭」と銘打ちました。本来ならこれが第八回目の宝物展覧会に当たるはずなのですが、これは番外扱いとなりました。葉書ではなくA4判ほどのザラ紙片面印刷の案内状は、笹部・堀内の両コレクシヨンには見当たりませんが、西宮市立郷土

資料館と神戸土鈴友の会前会長の鈴木博久氏が所蔵しています。場所は西宮東口の元の武庫郡公会堂別館で催されました。ほとんどの宗員は戦災でコレクションを焼失しました。それでも焼け残り品や手元にあるものを何とか展示したのです。案内状には当時の宗員十七名と浄願寺住職の氏名が連記されていますが、実際に参加したのは十一名でした。すでに有名無実の宗員がいたのです。

その後の宝物展覧会は、次の通りです。(追記(2)参照)

①復興まつり(九く十六時 浄願寺) 昭和二十二年五月四日(写真1)

案内葉書に「おまたせしました 西の宮めいぶつ 回目の宝物展覧会なのです。前年の「戦災趣味品 追憶祭」が番外の宝物展覧会だったからです。

この案内状には、折れた矢に「平和日本」の布切れが結ばれた凶案に、「古い剣法を捨て、新憲法が生れた! 国民主権の原則に立って、民主日本のあり方を示す新憲法が五月三日から施行されます。」とあり、その翌日に「復興まつり」が催されました。私が大学教養部の法学の講義を受講した時、憲法の教授が「ケンポウ」には「剣法」「拳法」「憲

宝物展覧会」と記されています。これが正式の第八



(写真1)
復興まつり

法」の同音異義語があり、どれも我が身を守る共通性があると言われたことを、思い出しました。

②第九回宝物展覧会（九く十六時 西宮市商工会議所）昭和二十三年十月二十四日

この案内葉書に、第一回から第八回の宝物展覧会（雅宝展）の記録が記されています。

③第十回宝物展覧会（総合大展覧会）（松坂屋四階催場へ「出開帳」）昭和二十四年二月十一日く十三日（く十六日まで日延べ）、会期中の二月六日に「立春大吉の会」が十三時から会場で開催。

この宝物展覧会は、宗員にとって一世一代の晴れ姿の見せ場となりました。この出開帳関連の葉書だけでも十葉、うち出品目録四葉も作られました（写真2・写真3・写真4）。宝物なき戦災寺、タケノコ寺も何とか出品物を融通して三十三か寺すべて出揃い、出品場所は一か寺あたり間口六尺、奥行き三尺の台が割り当てられ、特に珍奇なものや大きなものは特別出品場所で展示されました。一月二十三日に浄願寺で臨時住職会議が開かれ、二十六日までに浄願寺に集められた出品物は、高島屋のトラックで一



(写真2) 松坂屋出開帳



(写真3) 出開帳出品目録(一部)



(写真4) 出開帳礼状

括して搬入されました。

私が所蔵する高島屋の会場での記念写真（写真5）には、大人が三十六人、子供が六人写っており、会場は白土塀を廻らし、六角堂・五輪塔が特設されていることが分かります。大阪日日新聞社と松坂屋が後援しました。これが最後の宝物展覧会となりました。

（二） 甲子展

毎年春に催された、戦後の甲子展は次の通りです。戦前同様、浄願寺の三面大黒尊天の御開帳に合わせて行なわれました。

・第十五回甲子展（浄願寺）昭和二十三年四月
九日九〜十七時

この案内葉書には戦前の甲子展の記録が記されていますが、前回の戦前編で述べたように、第一



（写真5）
出開帳記念写真

回く第五回の正確な日付けは、戦災による記録喪失のため空欄となっています。戦後初の甲子展を「甲子展 KOTOSHI KARA 陣容新たに のりかへ 花々4・9再出発」と、阪神電車の駅名吊り下げ看板に見立てています。この年は宝物展覧会（雅宝展）と銘打つ催しを秋に予定していたためか、「『雅宝展』を復活し『甲子展』に合流して華々しく再出発致します」という言葉が、「『文明のともし灯』を囲む会」（三月七日）の案内状葉書に記されています。

・第十六回甲子展（浄願寺）昭和二十四年四月四日九〜十七時

案内葉書には、土井晚翠「荒城の月」を振った「荒情の尽き」の替え歌が三番まで記されています。歌詞を紹介しましょう。

春戦前の花の宴 のぼる紫烟の影も濃し 山なすタバコ九銭の 昔の「ひかり」いまいづこ

秋インフレの霜の色 民製タバコ数増えて 愚鈍の政府悩ましぬ 専売「光」値は高し 薫香ほろび五十

円 栄枯は移る世の姿 あゝ九銭のあの香り 昔の「光」いまいづこ

・第十七回甲子展（浄願寺）昭和二十五年五月二十九日九〜十七時

二度目の案内葉書（雅楽多宗創立二十周年祝賀会礼状を兼ねている）には、「ボクのつづりかた」と題して、「ぼくの家では、お母さんがいばつていて、お父さんはいつもシヨンボリしています。家がびんぼ

うなのは、お父さんの月給が安くて、おまけに、その月給を会社がなかなかくれないからです。……」という小文が載っています。遅配・欠配を、無着成恭や国分一太郎らの生活綴り方の気運が再興される世相とからめて記述したのです。

・第十八回甲子展（浄願寺）昭和二十六年五月二十四日九〇十七時

・第十九回甲子展（浄願寺）昭和二十七年五月十八日九〇十七時

・第二十回甲子展（浄願寺）昭和二十八年五月十八日九〇十七時

・第二十一回甲子展（浄願寺）昭和二十九年五月八日九〇十七時

これが最後の甲子展であり、事実上雅楽多宗の活動の終焉です。

(三) 宗員個人のコレクションによる記念展覧会

・寅年に因む「寅まつり」（大阪松坂屋四階催場）昭和二十五年一月四〇十六日（〇十九日まで日延べ、十三日休み）九時半〇十七時

長尾善三（狂虎洞）の虎に関わるコレクションの展覧会を、雅楽多宗創立二十周年記念行事として行ないました。期間中に阪神タイガースの選手サイン会や寅年の名士を招待した茶会などもありました。一月八日には松坂屋六階ホールで、長尾を囲む「虎の巻展とらまわりのまき会」が開かれ、その会の終りに配られた葉書大

の札状には「どらやき 御善菓子 本家とらや」の洒落が記されているので、茶菓子や土産として当日「どらやき」が配られたのでしよう。新関西新聞社が主催し、大阪市が後援とあります。浅田が奔走したのでしよう。前年、松坂屋で催された出開帳の余韻が続いたのです。

さらに後日談として、一月二十九日に浄願寺で「寅まつり成功祝賀新年会 『トラ』になりたい会」が催されています。

二、交歓（親睦・座談）会

本来の住職総会に当たります。昭和二十一（一九四六）年の活動については、浅田柳一『記録 西宮雅楽多宗 昭和五年五月五日』（西宮市立郷土資料館）に記載がありました（追記（3）参照）。昭和二十二（一九四七）年二十九日に催しの案内葉書のタイトルは、次の通りです。宗員が浄願寺に集まって、日頃思うところを談義しあつたのです。案内葉書の文面は、当時の世相を物語る史料として最もおもしろいので、ほんの一部が『西宮現代史 第三巻 社会・教育・経済資料編』（西宮市、二〇〇四年）と『西宮現代史 第一巻Ⅱ』（西宮市、二〇〇七年）に紹介されています。それらを参照してください。一部ですが、特に興味深いものを紹介しましょう。戦後の混乱がまだ顕著であつた昭和二十二、二十三年のものが、史料として読み応えがあります。洒落つ氣と批判精神は、これらの文章や図版を作成した浅田柳一の問題意識を自己表現したのですが、雅楽多宗員をはじめ当時の庶民の思いを代弁したゆえ、これらを目にし

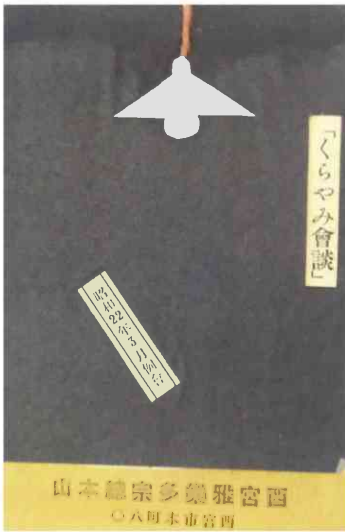
たものは溜飲を下げ、共感したのです。

浅田は雅楽多宗の例会案内葉書以外にも、個人的な思いを綴った葉書や年賀状なども宗員や知人に郵送しています。ジャーナリストとしての鋭い時代感覚と遊び心、しかも身内に浅田印刷所があったため、これほどまでに凝りに凝った葉書資料が、後世に残ったのです。

以下の年度別に時系列で列記し、興味深い事例を幾つか紹介しましょう。日付けは例会開催日で、そのあとに開催場所を記しました。なお便宜上、Aは浄願寺、Bは西宮池田町・松原町会事務所です。

①昭和二十二年

猪なべを囲む会（一月二十二日A）（写真6）、世直し座談会（二月十六日B）・くらやみ会談（三月十六日B）（写真7・8）、清談演舌会（四月六日B）、納涼「お好み演芸会」（七月六日 下太市・八幡神



(写真7)
くらやみ会談①



(写真6)
猪なべを囲む会

社)、相棒を語る会(八月三日 明石市公会堂別館)、清貧を語る会(九月七日A)(写真9・写真10)、闇の市(趣味の交歓会 十二月七日A)

「猪なべを囲む会」が、笹部の手元に残された最初の案内状です。昭和二十一(一九四六)年のものは笹部コレクションにはありません。他でも私は未見です。

「世直し座談会」には、「新日本再建の大事業が画餅に帰せぬよう、暗い世の中を明るく暮らして行けるよう。」との願いと意気込みが記されています。

「くらやみ座談会」の案内状は二枚重ねになっており、電気が点かない電球が描かれた一枚目をめくると、蠟燭の灯火が明るい図柄の二枚目が現れます。そして次のような文章が記されています。「いわゆる三月危機に直面して、先づ最初の試練は電力キケン!水と石炭が不足して、水力は麻痺する火力は停る。連日連夜の停電で、電車も工場も



(写真8) くらやみ会談②



(写真9) 清貧之書①

半身不随。街も家庭も文字通りの闇生活が続くみづほの国に米がなく、日出づる国にヤミがのさばる敗戦の現実は何等の生活にも痛々しい。」

「相棒を語る会」の案内状には、「蒙御免（東）横綱上りの物価 大関ヤミ成金 関脇 集団買出し 小結 正直者の損前頭 電力飢饉 産業不振 パンパンガール 栄養失調（西） 横綱地に落た道義 大関 隠退蔵物 資 関脇 主食の欠配 小結 悪徳官吏 前頭 交通地獄 失業増大 兇悪犯罪 タケノコ生活」など、世相を活写する用語が番付表に並んでいます。

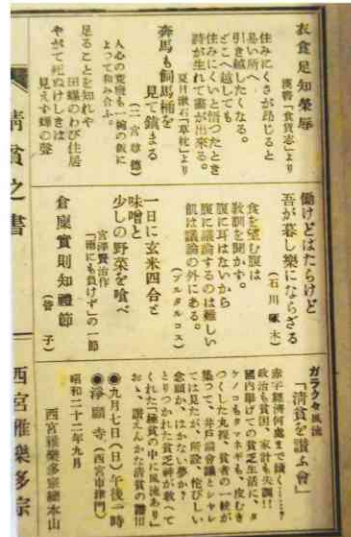
そして二枚を重ねて書物風にした「清貧の書」には、「極貧の中に風流あり」として、瘦せ我慢です。

②昭和二十三年

「闇風飛躍」年始の会（一月五日A）（写真11）、「寒震」我慢会（二月八日A）（写真12）、「文明のともし灯」を囲む会（三月七日A）、惜春の集ひ（四月十一日 川西市・西田桃花邸）、七夕に因む歌合せ雅会（清涼漫



(写真11)
饑我新年



(写真10)
清貧之書②

談・楽焼窯参観」(七月四日 明石市月照寺・小倉千

尋楽焼窯、素人のど自慢(八月一日A)、これじや

煙草も素煙会(九月五日A)・第九回雅宝展準備相談

(十月三日A)、槍クリスマス会《遣り繰り済ます会》

(十二月五日A)

「闇鼠飛躍 年始の会」は「饑我新年」で、「これだ

けの配給で、正月三ヶ日を越して呉れとは、チト無

理やおまへんか、お酒もお餅もロクになし、着物も

ないし家もなし、闇の品買ほうにも金はなし、おまけに燃料はないし電気は点かんし、寒ふて暗うて腹

のへる正月、……」、ぼやきと憤りが綴られています。

「勉強しませう会」には、「敗戦文学の辞典 俸給 持ち物 を売つても足りない生活費の補助として、勤め

先から出す金メチル 永久に酔いっ放しにして呉れる稀代の銘酒 自由主義 勝手放題のこと……学生アイス

キャンデーの行商人……文化間にあわせの事文化蠟燭、文化タキツケ、文化住宅、文化生活の類……敗戦当

時の文献を読む子孫のために……と、浅田の面目躍如の感があります。

③昭和二十四年

牛なべを囲む会(一月十五日A)、臨時住職総会(一月二十三日A)、老曲大会(三月六日A)、雅楽多座「弥

生興行」(四月十日 神戸市灘区・中川京二邸)、納涼交歓会(八月二十一日A)、こんな女に誰がした会(十一月



(写真12)

「寒震」我慢会

六日A)、ABC講えびすこう(十二月四日A)

昭和二十四(一九四九)年になると少しは世の中が落ち着いてきて、正月には牛なべを囲んでいます。そして前述したように、二月に大阪松坂屋で出開帳「第十回宝物展覧会」が開かれます。

「こんな女に誰がした会」では「パンパン渡世を笑ふ勿れ」と題して、浅田はパンパンの思いを代弁しています。「自分の力でこの乱れきった世の中を生き抜いて行くことが立派だと私は思ふの。：『身を売っても食へない世の中』をまづ何とかして呉ないものだらうか。」昭和二十二(一九四七)年に菊池章子が歌った「星の流れに」(テイチク)という曲がヒットし、清水みのる作詞の「こんな女に誰がした」が流行語になりました。さらに昭和二十四年に山本薩夫監督により映画化されました。

「ABC講」は西宮戎を振ったもので、「ひどい金話りと首切り旋風、ボーナスどころか給料遅配で、配給もの買ふ金もない、セツパ詰ったフトコロ具合。全く浮ぶ瀬のない年の瀬である。」まだまだ生活は苦しい。

④昭和二十五年

観月御宴(九月四日 明石市・朝顔光明寺)、「吾が蒐集に悔いなし」(三月五日 阪口砂山邸)、変り種風流人楽
焼大会(九月十七日 芦屋市・打出焼窯元)、忘厄会(十二月三日A)

「吾が蒐集に悔いなし」は、戦前の滝川事件とゾルゲ事件をモデルにした黒澤明監督の映画「わが青春に悔なし」を振ったものです。昭和二十五年につくられヒットし、この言葉も流行語になりました。

⑤昭和二十六年

憂うれで議散はらの会（鬼年一月七日A）、忘厄会（二月四日A）、さくら祭園遊会（エイプリルの出来かせ 四月一日A）、怪談の夕へ（六月十六日A）、廃物利用研究会（九月十六日A）、土ひねりの会（十月二十八日 打出 焼窯元、秋の「迷作陶芸展」十一月十八日）、本年名残りの交歓会（十二月二日A）

「憂うれで議散の会」の案内状は年賀状を兼ねて、「金かね餓が辛しん年」とあり、「年の始めの嘆きとて おお銭ぜなき世よのせち辛しんさ 松竹どころか寝正月 ため息つくこそさもしけれ（以下四番まであり）とぼやくのです。

「さくら祭園遊会」は浄願寺に集合して甲陽園の料亭（つるやなど）に繰り出し、芸者をあげてただで飲み食いできるという趣向でしたが、四月馬鹿の嘘でした。浄願寺で茶話会をしたのでしよう。

⑥昭和二十七年

「實流か他た会」（一月二十七日A）、「無茶苦茶会」（六月一日 西宮市・海清寺（写真13）、戯会笑集（十月二十六日A）、交換会（十二月七日A）

当時、白鹿記念酒造博物館の研究員であった寺岡武彦氏から、笹部新太郎が変なお茶会に出席しているんですよと言って、笹部の所蔵していた一枚の写真（写真14）を見せてもらったことがありました。「無茶苦茶会」は雅楽多宗の例会であったのです。笹部は後列右端、雅楽多宗執事の浅田は前列右端で、大きな茶碗と茶筌を持っています。笹



(写真13)
無茶苦茶会案内状

部と浅田の交流を物語る貴重な資料です。その他判明している人物名を記しておきましょう。前列左から小松原翠邨、四人目が多喜幸三郎、五人目が永井清司、七人目が葛山磐次。二列目左から二人目が上田鹿園、三人目が丸山松蔵、五人目が阪口砂山。三列目左端が長尾善三、三人目が音馬福蔵、五人目が難波正覚、六人目が勝部正造です。笹部のポケット日記には「朝日麦酒西宮工場」「西宮海清寺 西宮雅楽多宗無茶苦茶会」と記されているので、ビールを飲んだあとの無茶苦茶会だったのでしょうか。奈良の西大寺の大茶盛を真似たのでしょうか。

⑦昭和二十八年

秋を語る座談会（十一月八日A）

⑧昭和二十九年

馬肉祭（一月十七日A）、住職総会（二月七日

A）

住職総会の交歓会はしだいに開かれなくなり、昭



（写真14）
無茶苦茶会記念写真

和二十九年で幕を閉じます。

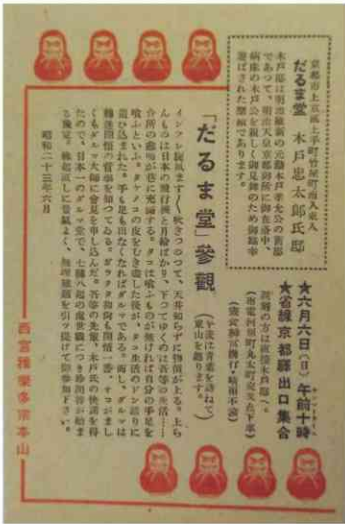
三、社会見学

世の中の落ち着きと生活のゆとりが出てくると、雅楽多宗の戦後の例会に、社会見学やハイキングが増えてきます。両者は必ずしも厳密に分けられませんが、以下、時系列で記します。

①昭和二十三年

水産博覧会（五月九日 明石市）、だるま堂（六月六日 京都市・木戸孝允旧邸）

だるま堂見学案内状（写真15）には、「インフレ旋風ますます吹きつのため、天井知らずに物価が上る。上らんものは日本の飛行機と月給ばかり、下がってゆくのは吾等の生活……台所の悲鳴が巷に充滿する。タコは喰ふものが無ければ自分の手足を喰ふといふ。タケノコの皮をむき尽した後が、タコ生活のドン詰りに追ひ込まれた。手も足も出なくなればダルマである。而し、ダルマは転迷開悟の哲学を知つてゐる。」と記されています。私はだるま堂の前での記念集合写真（写真16）を持ってい



(写真15)
だるま堂参観案内状

ます。大人が三十一人、子供が四人写っています。前列左から永井清司、音馬福蔵・□・□・中川元三郎（黙音）・勝部正造。二列目左から二人目が多喜幸三郎。三列目右端が浅田柳一、四人目が高山岩三郎。四列目左から二人目が葛山馨次。最後列の右に首だけ写っているのが長尾善三です。

②昭和二十四年

椿の本陣（五月十五日 茨木市）

③昭和二十五年

毎日新聞本社（二月十九日）、姫路城（四月九日）、大阪中央放送局（五月七日）、東洋民俗博物館（八月二十日 奈良市）、「雅楽多観光団」（貸し切りバスで大阪観光 十月一日）

「雅楽多観光団」は当日十二時半に大阪駅東端の地下のバス待合室に集合し、大阪観光バスに乗って大阪市内を半日遊覧しました。笹部新太郎も参加し、大阪城天守閣の入場券を案内状とともに保存しています。さらには勝部正造宛てに出した出欠返事の葉書を後で返してもらい、合せて保存しています。まめな蒐集癖のある笹部ならではの整理保存ぶりです。大阪城では桜の話をしたことでしょう。

④昭和二十六年



(写真16)
だるま堂参観記念写真

日本盛酒蔵（二月二十六日 西宮市）、綱かけ祭参観（二月十五日 奈良眞磯城郡）、アサヒビール西宮工場（七月十六日 西宮市）、神戸海洋気象台見学と神戸港巡り（八月五日）、新日本放送（現在の毎日放送、十一月十一日）

⑤昭和二十七年

飛鳥おんだ祭参観（二月六日）、田縣祭参観（三月十六日 愛知県大縣神社・田縣神社）、生駒山天文博物館（九月六日）

⑥昭和二十八年

正倉院展と奈良東部民俗資料探訪（十一月一日）

昭和二十七、二十八年の参観、探訪は雅楽多宗の例会というより、浅田の個人的趣味による同行呼び掛け行事になっています。形式的にも雅楽多宗を続けたいという気持ちの現れです。

四、ハイキング

①昭和二十二年

六甲^{ハイキング}栗毛（六月一日）、食糧苦篇「暗夜行路」（十月五日 池田市室町会館）、紅葉狩（十一月十六日 箕面市・西江寺）

「六甲^{ハイキング}栗毛」には、「今年もまた、お米の配給が乱れて来ました。遅配欠配の危機が目前に迫って居ります。『明日の活力』のため、山のオゾンを胸一パイ配給いたします。」と記されています。

食糧苦篇「暗夜行路」(写真17)は昼食持参、さらに実費で芋の試食会をしています。案内状に描かれた切符の図柄には、「食糧難により買出ゆき監視線経由 途中下車厄回」と書かれ、本文には「イモのイの字はイノチのイの字」の替え歌も載っています。

②昭和二十三年

田舎道ハイ会(十一月七日 西宮市・広田神社など)

③昭和二十四年

深緑に憩ふ「野遊会」(六月五日 武庫川河畔)、野道を行こう会(十月二日 芦屋市・高座の滝)

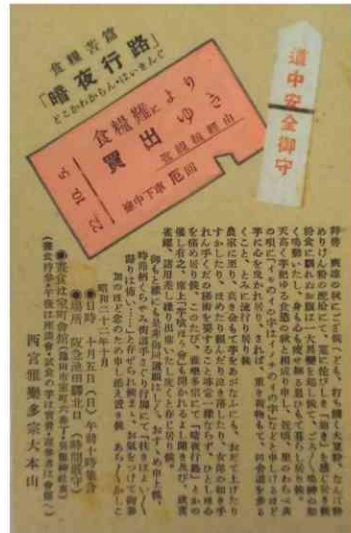
「野道を行こう会」の案内状には、浅田創作の替え歌二種が披露されています。

こゝはどここの細道じゃ

こゝはどここの抜け道じゃ ヤミ買出しの抜け道じゃ どうぞ通して下しゃんせ 荷物の多い者通しやせぬ

このごろ租税の値上がりにお米を売って払います 通りゃんせ 通りゃんせ 行きはよいよい 取締り恐

い 恐いながらも 通りゃんせ 通りゃんせ



(写真17)

食糧苦篇『暗夜行路』

あの町 この町

あの人 この人 泣き暮れる 泣き暮れる 今とる月給じゃ 足りせん 足りせん 何でも だんだん 高くなる 高くなる 今とる月給じゃ 買えやせん 買えやせん 毎月 赤字の 足が出る 足が出る 今とる月給じゃ 喰えやせん 喰えやせん

④ 昭和二十六年

ほととぎすを聴こう会（六月九日 奈良県生駒郡・王龍寺）

⑤ 昭和二十七年

「おめこ桜」探訪（七月六日 和歌山市・観音寺）、紅葉を訪ねて（十一月十六日 神戸市須磨区・禅昌寺）

観音寺の「おめこ桜」は熟した果実が女陰の形に似ているので、このように名付けられました。蒨蓄が傾けられたことでしょうか。笹部のポケット日記には「紀州観音寺↓和歌山城 西宮ガラクタ宗見学」とあります。

五、講演会・文化人懇談会

① 昭和二十二年

白河渥氏を囲む会（六月二十二日 芦屋市・阪口砂山邸）

② 昭和二十三年

「そんなに見たい会」(洋画家五人、二月二日 阪口砂山邸)

③昭和二十四年

七夕に因む「天の川遊覧」(高城武夫講演 七月三日 大阪市・電気科学館)

④昭和二十五年

笹部新太郎「植物閑話」(六月一八日 宝塚植物園内宝集茶席)

笹部は桜以外の植物についても深い学識を持っていました。案内状は笹部を「辛辣な皮肉と洗練された話術」の持ち主と紹介しています。

⑤昭和二十七年

阿部直吉『大阪すし』を語る」(三月二十三日 西宮市民会館)、牧村史陽『心中天の網島』の道を歩く」(四月二十七日 大長寺)、魚澄惣五郎(古銭大展覽会 五月十一日 大阪市北区・豊国神社社務所)、牧野島吉「野鳥の生態」(八月三日 西宮市・甲山神呪寺)

⑥昭和二十八年

神崎遺跡めぐり(広濟寺で四人の講話 四月二十六日)【主催】西宮雅楽多宗・大阪ことばの会・近松研究会

雅楽多宗の活動が終焉に近づいてくると、他団体との共催や、他団体の行事に便乗参加が目立つてきます。独自の企画を立てるのがしんどくなってきたのかもしれない。別の見方をすれば趣味のネットワークが広がったとも言えるでしょう。

六、ラジオ出演

①昭和二十七年

新日本放送「大阪アラベスク 西宮雅楽多宗構成 コレクション十題」(八月)

これは電波による出開帳です。毎週月曜日から金曜日の午後四時十五分から十五分間、十人の宗員が出演。浅田柳一が聞き手として毎回登場。ただし他団体の趣味人も交替に入れ混せて放送されたので、全員が出演するのに一カ月はかかったことでしょう。「コレクション十題」は次の通りです。

キセルの話(多喜幸三郎)、お多福の話(小松原翠邨)、張古玩具の話(丸山松蔵)、鼠の話(藤井千鼠庵)、手拭の話(永井清司)、宝船の話(葛山磐次)、たばこの話(得永幸作)、土鈴の話(阪口淳)、大黒天の話(宮川説郎)、風呂札の話(宮本圓心)。

七、法事と慶事

①昭和二十三年

近松門左衛門二百二十五年祭(十一月二十一日 尼崎市・広濟寺)

【主催】西宮雅楽多宗・大阪ことばの会・近松研究会

②昭和二十五年

物故宗員彼岸大法要修行（三月十九日A）、西宮雅樂多宗開創二十周年記念祝賀会（五月五日A）、高山岩三郎生前葬と松井蛙聲葬別会（十一月十九日A）

「物故宗員彼岸大法要修行」では、物故宗員として十三人の氏名が列記されています。大部分が雅樂多宗結成時の宗員でしょう。

「西宮雅樂多宗開創二十周年記念祝賀会」は五月五日午後五時五十五分に催されましたが、案内状に、時刻については「サンマータイムにあらざ」と注意書きされています。八十五歳の高山岩三郎が最長老とあります。

高山岩三郎は尼崎市西字中惣新田二四九ノ三に居住していましたが、九月三日のジェーン台風による高潮で家財も蒐集品も水浸しにありました。蒐集は一代限りの楽しみと悟り、死期の近づくを知って、生前葬を企画しました。雅樂多宗の宗員は、十一月一日に脳溢血で亡くなった松井蛙聲の追悼もあわせて「葬列会」を行いました。私が所蔵している浄願寺で直会の折り詰めを食べている記念写真（写真18）は、この時のものと思います。「無茶苦茶会」の時と同じ袴姿で立っているのが浅田柳



(写真18)
葬列会

一、正面奥に主賓として座っているのが高山岩三郎です。右列手前から三人目が中川元三郎、八人目が藤井千鼠庵です。

③ 昭和二十六年

夕霧忌（一月六日 大阪市西区新町九軒・吉田屋）

【主催】西宮雅楽多宗総本山・大阪ことばの会

西宮雅楽多宗三十三所納経実印完成押捺会（五月二十日A）

大阪市民文化賞・なにわ賞受賞諸先生祝賀会茶話会

（十一月十七日十四〜十七時 四天王寺本坊客殿）

【主催】大阪藝文協会・大阪ことばの会・近松研究会・西

宮雅楽多宗

赤穂浪士をしのぶ会（十二月四日 吉祥寺・福泉寺・長

久寺）

【主催】大阪ことばの会・近松研究会・西宮雅楽多宗

「夕霧忌」は大阪の趣味人・文人の定番行事です。この太夫は京都・島原にいたのですが、やがて大坂の新町廓の売れっ子になります。延宝六年一月七日



(写真20)
第八番童楽山玩虎寺



(写真19)
第三番活惚山甘茶寺

(一六七八年二月二十七日)に亡くなり、京都の清涼寺や大阪の浄国寺にお墓があります。歌舞伎の「夕霧名残の月」「夕霧七年忌」、人形浄瑠璃の「廓文章」でよく知られています。当日は、大阪ことばの会・近松研究会主催の「夕霧忌」もあり、笹部のもとには両方から案内状が来ています。

五月五日から十五日後の二十日に、「西宮雅楽多宗三十三所納経実印完成押捺会」が行なわれました。笹部コレクションと堀内コレクションに朱肉の押捺が納められています。二点(写真19・写真20)紹介しましょう。これによってこの年の時点での宗員三十三人が分かります(追記(4)参照)。宗員にとつてこれが活動の一区切りとなったと言えるでしょう。

「赤穂浪士をしのぶ会」は討ち入りから二百五十年を記念して大阪の三寺を廻り、長久寺で「忠臣蔵九段目」が演ぜられました。

④ 昭和二十七年

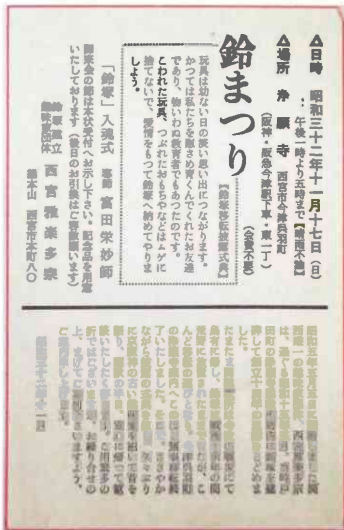
中川黙音「葬行会」(九月二十八日 神戸市灘区・祥龍寺)

中川元三郎(黙音)は八月二十八日に祥龍寺で亡くなりました。享年七十一歳。

⑤ 昭和三十年

喜こぼつ会(七月十七日A)

⑥ 昭和三十二年



(写真21) 鈴まつり

鈴まつり（十一月十七日A）（写真21）

「喜こぼう会」と「鈴まつり」については、雅楽多宗の終焉で後述します。

八、西宮雅楽多宗の終焉

昭和二十五（一九五〇）年の「西宮雅楽多宗開創二十周年記念祝賀会」を契機に、宗員の高齢化も進み、例会活動が下火になっていきました。昭和二十六（一九五一）年三月は初めて例会が休会となりました。浅田は「ガラクタ一切費六吏員（筆者注、抜け目のない税務署の小役人）に差押え致され候に付」休会の已む無きとなったと記していますが、実際のところはどうかだったのでしょうか。休会の理由付けなのでしょう。そして新税の取立て思案をふざけ、心で列記解説しています。

昭和二十七（一九五二）年十二月には「チョット一ぶく」と題し、以後、例会案内や浅田の個人趣向の葉書通信は不定期発行にすると宣言しています。七年間に発行した葉書通信は百二十数葉になると記述しています。これ以後最終まで九葉発行されていますので、総数は百三十葉を超えらると思われます。

笹部桜コレクションには百三十葉（複数同一のものは一葉と数えた）ありますが、数葉抜けている可能性があります。昭和二十一（一九四六）年のものはありません。

そして昭和三十（一九五五）年七月十七日十三時から、浄願寺の服部泰妙師の喜寿の祝賀「喜こぼう会」が浄願寺で催されました。この案内状に浅田は「大和新聞『私のコレクション』連載中は御支援下さ

いまして、ありがとうございます。引続き、『これはデツかい』と『珍品拝見』を企画にのせてゆきます。本山から指示のあった節は、よろしく御協力下さいませ。」と書き添えています。『大和新聞』（一九五五年四月五日）の「ご自慢くらべ11 私のコレクション」の記事は前回に紹介しました。また、『国際新聞』（一九五五年一月一日）の「年賀状・珍オメデト集」のなかに、浅田の年賀状が二例紹介されています。昭和二十三（一九四八）年は「餓春 併て貴下の満腹を祈上候」、昭和二十六（一九五二）年は「金餓辛年」と替え歌の歌詞が載っています。昭和二十六年一月七日に催された「憂き議散の会」の案内状（前述）を兼ねた年賀状です。これら両紙を調べると、浅田執筆記事や企画編集記事がまだまだ見つかるでしょう。

さて、いよいよ雅楽多宗は幕を閉じます。鈴塚を浄願寺説教所跡地から浄願寺に移転させ、昭和三十二（一九五七）年十一月十七日に「鈴まつり」を浄願寺で行ないました。富田栄妙師が鈴塚の入魂式の導師を努めました。現在、鈴塚に納められた土鈴はほとんど原型を留めず、土に返ろうとしています。ここに西宮雅楽多宗はすべての活動を終えました。宗員たちは時折、浄願寺を訪ねて鈴塚を見ては往時を偲んだことでしょうか。その浄願寺も阪神・淡路大震災で被災して建て替えられました。鈴塚だけは変わらぬ姿で立っています。

浅田耕一郎は西宮という地域に根ざしつつも、戦後は組織を阪神間へ拡大させて雅楽多宗を発展させようと試みました。宗員は増え、より好事家的趣味人が加わったのですが、それは逆に西宮という地域性を希薄にしていきました（追記（4）参照）。雅楽多宗は、総本山（事務担当）の音馬福蔵に代表されるささやかな日常的蒐集家と、永井清司に代表される多様でマニアックな蒐集家が共存する和やかな楽

しい会でした。

敗戦後の日本の心の復興、心の糧として、雅楽多宗執事として奔走し、実質事務方や広報活動を担当した浅田の献身なくして、雅楽多宗の復活はなかったでしょう。世の中が落ち着いてくるとともに雅楽多宗の活動は下火になっていきました。ガラクタ蒐集展示よりもしだいに見学会やハイキング、講演会へと活動内容が変化していきました。こんにちでは一般化した市民サークル、社会教育文化活動の感さえます。しかし、宗員の高齢化、高度経済成長の社会変化のなかで、雅楽多宗は幕を閉じます。

おわりに

生真面目と遊び心、そして批判精神は、物質（金銭）的ゆとりと精神的ゆとりによって生まれます。ささやかな贅沢と清貧は矛盾するわけではありません。趣味なき人生は寂しいものです。Eテレの「団塊スタイル」には様々な趣味人が登場します。そのような人は皆、澆刺としています。前回に述べたように、平和で自由な社会、殊に内心の自由が保証された社会でなければ、趣味どころか学問も教育、芸術も衰退していきます。

さて、コレクションは一代限りなのでしょう。戦災・震災・風水害などによる消失や焼失もあります。本人にとつての宝物は、家族・遺族にとつてはガラクタかもしれない。公共図書館の書庫や博物館の収蔵庫が満杯で、新たな受け入れが困難な事例もあります。文書館にいたっては貧弱そのもの、設置され

ていない自治体すらあります。

西宮雅楽多宗の高山岩三郎は台風による高潮で全コレクションを失いました。生前葬の葬別会の案内には「水移魂帖」の文字が見られます。中川黙音は死没後、コレクションは散逸喪失しました。宮本圓心の土鈴コレクションが最明寺郷土館に所蔵されたのは、幸運な稀有な事例です。雅楽多宗の宗員たちのほとんどが戦災ですべてを失いました。戦後の蒐集品も震災で失なったり、本人の没後に散逸していきましました。

大阪の三大蒐集家の忍頂寺務の忍頂寺文庫は大阪大学図書館に、南木芳太郎の南木文庫はほんの一部が大坂城天守閣博物館に納められています。また、三宅吉之助の宇津保文庫の瓦・土器のみ甲陽学院が所蔵し、辰馬考古資料館に寄託されています。

奈良の水木十五堂（要太郎）コレクションは子・孫三代に亘るものすべてが、国立歴史民俗博物館（佐倉市）に収蔵されています。

そして白鹿記念酒造博物館には、笹部新太郎の西宮市笹部桜コレクションと堀内冷のえびすコレクションが寄託され、公開されています。コレクションは一代限りにはならないのです。

日本各地には様々な趣味の会や地域に根ざした研究会・結社・学会があります。岩田書店発行の『地方史情報』に目を通すと、その感を強くします。西宮市には「西宮文化協会」があり、「甲陽史学会」があります。

また、「歴史資料ネットワーク」は、震災や水害などの災害にあった歴史資料のレスキュー活動をして

います。もし当時そのようなものがあれば、高山岩三郎の蒐集品も救えたかもしれません。

西宮雅楽多宗は小さな結社でしたが、西宮神社の門前町を中心に活動を続けました。地域に根ざした人々の豊かな営みに、私の心の中まで楽しくなりました。記念写真の宗員の皆さんは、良い表情をなさっています。

「書林かみかわ」からいただいた写真によって、西宮雅楽多宗が西宮市民に再認識される切っ掛けとなったことを嬉しく思います。白鹿記念酒造博物館・西宮郷土資料館には、史料閲覧に加えて種々御教示くださいました。また、市民の皆様にお話する機会を与えてくださいました、大手前大学に感謝いたします。

《追記》

(1) 『記録 西宮雅楽多宗 昭和五年五月五日』(以下『記録』と記す)の十六―十七頁には、浅田耕一郎は次のように記している。

本宗再発足

この混沌たる世相を眺めて吾等宗員は、敢然と起った。敗戦後、焼土の中に忘れられた「心の糧」―かつての美しい伝統とゆたかな情緒にまさる上方文化を再び立ち立てようと図った。戦争の傷痕なほ癒えぬ昭和二十一年一月、壕舎生活の宗員を狩り集めて顔を合した。まさに終戦後約半歳経過後の事である。この会合によってお互ひの心の琴線に触れあつた何ものかがあつた。吾々本来の情操趣味を喚起したのである。せめて混乱の世相の中に吾等の生活を美しくし、明るくし、潤ひを持たすべく毎月一回集合して趣味の涵養に寄与しよう、一、二、三、同志の発案により敢然焦土の中から再出発する事になった。

後記

本宗開宗以来の歴史を綴った記録帳を焼失した事は残念であるが、茲に再び筆を採り、昭和二十一年一月、敗戦後本宗の再起の日から、稿を起して記録の筆を続けることとした。

昭和二十一年一月

西宮雅楽多宗大本山執事

大本山と称した音馬福蔵宅が、昭和二十年八月五日夜半から六日未明にかけての西宮大空襲で焼失したため、そこに保管されていた記録帳も失なわれた。浅田執筆によるこの記録帳には、戦後の記録は昭和二十一年のものしかない。

(2) 『記録』二十四―二十五頁によれば、昭和二十一年四月二十二日午後一時から矢野倉造宅(西宮市前浜町八)で、「本宗創立十五周年記念事業相談会」が開かれた。宗員八名が出席した。浅田は次のように記している。

来る五月五日は本宗開創十五周年に相当する為め趣味界甦生のトップを切つて、京阪神の趣味家を西宮へ招待し、終戦後最初の会合を開くことに決定。企画準備の一切を永井・浅田の両氏に一任す。

「戦災趣味品追憶会」の開催記事は、当日の『神戸新聞』(昭和二十一年五月五日)に浅田の尽力で掲載された。浅田はこの記事の切り抜きを『記録』の二十九頁に貼り付けている。

「戦災趣味品追憶会」の案内状と『記録』二十六―二十九頁の記述を合わせると、当日の趣向がよく分かる。第一会場の浄願寺説教所跡地では、午前十―十一時半に鈴塚の前で戦災趣味品追悼まつりと記念写真撮影を予定していたが、雨のために中止となった。追悼まつりは浄願寺の僧侶による仏事法要を予定していたのだろう。第二会場の公会堂別館では、十二時から十六時まで、「空襲下持出品と焼け残り宝物並に戦災掘出品等展覧」「西宮七福舞踏団の歌舞奉納」来会者の似顔画と世相漫画の席上揮毫」が催された。七福舞踏団は矢野倉造が主宰する十数名の少女舞踏団で、五彩の袂を翻して踊った。似顔絵描きは、絵の得意な永井清司が腕を振るつたのだろう。永井は戦前、自分の似顔絵土鈴を製作している。

当日の出展者と出展品は次の通りである。

宮本円心(土鈴)・矢野倉造(菟印帳と漫画)・永井清司(署名集)・中川京二(箸)・音馬福蔵(焼爆古銭)・中川黙介(瓦)・高山岩三郎(虎に関するもの)・勝部正造(記念乗車券)・多喜幸三郎(焼爆品)・井上三千

雄（案内状等）・浅田耕一郎（戦争記念物）

浅田は焼け跡から蒐集した瓦を数多く出展したに違いない。井上は出展しているが当日は欠席した。杉本丙午樓は三か月前の二月に入宗しているが、出展はしていない。宗員の出展者も出席者も十一名であった。

京阪神の雅友来観者は四十数名。招待者には「窮迫世相三態 衣食住の絵馬」（三枚 一組）を頒布した。作品は阪神在住の三画伯、「衣」は小川青華、「食」は牛尾桃里、「住」は桂田湖城の作品であった。牛尾は琴浦焼きの三代目と、四代目和田桐山の絵師。桂田は慶応元（一八六五）年に近江で生まれ、没年不明、晩年は西宮に在住した日本画家。小川についてはまだよく分からない。この記念品の包み紙を浅田は『記録』の二十九頁に貼り付けている。（3）『記録』に記された昭和二十一年の住職総会の記録の要点と、浅田が毎月の巻頭に記述した世相偶感の箇所を紹介する。

・一月二十二日 永井清司宅（西宮市染殿町一〇） 八名出席

「雅樂多宗焦土に起つ!! 終戦後初顔合せ」

▽戦敗後、初めての新年を迎へた。勿論正月気分は毫も無い。明治維新へ逆転した、日本の姿だ。一望赤緒茶けた焼土の中に、点々とバラックの仮住宅が建つ。復興を奏でるノミの音と表現したいが、傷ましい罹災者の曇った面には気力が抜けて、国民の総てが憔悴し切つてゐる。

▽戦災後、焼け出されて疎開等にて離散した本宗員中、連絡のつく者のみ口伝して先づ第一回の会合を開いた。恐ろしき空襲の夜の思ひ出。敗戦後の悲惨な世情等を語り合ひ、茶菓、ぜんざい等の饗応を受け、久し振りに和やか気分を取り戻した。

▽幸ひにして宗員悉く無事健在なることを知つて喜び合ふ。大日本も元の裸に帰った。吾々も元の丸裸になつた。緊禪一番、出直して掛らうと、一回元気に四時散会。

▽今後毎月一回例会を開くことに決定した。

・二月二十三日 浄願寺 九名出席

「服部泰妙師を囲んで」※服部師は病臥中で、出席者の「悲喜交々の心情をブチ撒けて鬱憤を晴らし」て散会。

▽今年の冬は比較的温暖の日が続く。それでも夜更けて隙間洩る寒風はバラック生活者の肌を射す。復興住宅は建たない。食糧は無い。戦災者は戦争犠牲者の中でも最も気の毒な立ち場に置かれてゐる。為政者の罪か。政治

の貧困か。困つた問題である。

・三月二十二日 宮本円心宅（西宮市荒戎町三十三）九名出席

「宮本圓心氏を慰める」※宮本は空襲で奥座敷の一室だけ焼失を免れた。先般夫人を亡くした。

▽哀れ敗戦の世の姿は冷酷な現実となつて生々しく吾等の眼に映る。中でも戦後各地に簇出した闇市場なるものは、確かに驚嘆すべき存在の一つである。

・四月二十二日 矢野倉造宅（西宮市前浜町八）九名出席

「本宗創立十五周年記念事業準備相談会」※七福子供舞踏団の舞踏を数番鑑賞。

▽主食の前途を憂ふる声が高い。戦時中二合三勺の米穀配給が戦後は二合一勺となり、更に食糧危機を目前に控へて一割減配といふ。声を大にして世界に呼びかけた。大東亜共栄圏は僅花一朝の夢と化し、哀れ敗戦のみじめさは生き残つた八千万人の腸にまで染み渡る。

・五月五日 元公会堂別館 十一名出席

「開宗十五周年記念 戦災趣味品追憶祭（やけたがらくたあきらめ会）」

▽戦後のインフレに対し、大蔵省は金融措置令を断行して預貯金を封鎖し、流通貨の旧円は新円と引換へる事になった。加ふるに食糧危機に突入せる悪条件の下で趣味の会合はどうかと案ぜられたが蓋を開けてみれば意外の好評。宗員一同まつ安堵の胸を撫で下した。

・五月二十六日 六甲山頂凌雲荘 十一名出席 ※接待役の中川京二の都合が悪く、二十二日の予定を二十六日に変更。

「風薫る五月―六甲山の山つつじ鑑賞」※ハイキング

▽阪神国道には進駐軍ジープが砂塵を捲き上げ、織るに疾走してゐる。その後から、大日本の木炭自動車が青息吐息の煙を吐いて喘ぎ喘ぎついで行く。戦前誰がこんな風景を想像したものがあらうか。

・六月十六日 多喜幸三郎宅（西宮市川東町二十五）十三名出席

「本宗の内容、改造案提議」※阪神間の趣味家に参加を求め、有名無実の宗員五人を除名。

▽戦災に焼けた宗員中、多喜氏は罹災のトップを切つた一人で宗員中最も気の毒な方である。多年蒐集の駅弁レットル、宝船、蒐印帖などは惜しくも悉く烏有に帰した。

▽この程、元の焼跡にバラック仮寓を建設、漸やく出来上つた新装の部屋にて、窓を叩く梅雨の雨音を聴き乍ら趣味話しに一トしほの花が咲いた。雅楽多はなくし、食糧のはなしから天皇制のはなしまで、戦敗さまさまの世相を語り合つて風情のある梅雨どきの半日を過ごした。

▽食糧事情は愈々悪化を辿り、前途益々不安の雲行きなり。久しく甘味の配給に植えてゐる折柄、多喜氏の行為により、秋空糧食、甘味の分配を受け、宗員一同渴を医やすの思ひであった。

・ 七月二十一日 勝部正造宅（川辺郡園田村法界寺）十四名出席

※宮本円心がインク一本、中川京二がスタンブ台一個、勝部正造が大本山ゴム印を寄贈。このゴム印は浅田から西宮市に寄贈され、現在西宮市立郷土資料館が所蔵し、第三十一回特別展示「阪神沿線ごあんない」にのみや郊外生活」（二〇一五年七月一八日～八月三〇日）で展示された。

「食糧危機突破懇談会」

▽主食の配給は益々乱脈。遅配、欠配、減配等の現状。各地に起つて世情騒々し。勝部氏の好意により食糧危機突破懇談会の看板を掲げて開催。酷暑の際なれど全宗員が参加。矢野氏の揮毫もありて仲々盛會。

・ 八月二十五日 阪口淳宅（芦屋市春日町七）十九名出席

「納涼スキバラ會談」

▽八月十五日は日本歴史に一大汚点を印した敗戦一周年の記念日である。あれから一年。時代の転換は実に凄まじい勢ひで波瀾を極めてゐる。

▽主食のコメは十日に一日分だけ配給といふ惨めさ。あとは苦心惨憺の代用食生活にて、各家庭の米櫃は愈々緊迫す。題して「納涼スキバラ會談」―空腹なれど高楊子。趣味三昧の境地も亦一興と瘦せ我慢を張る。

・ 九月八日十三夜 六甲山頂ケーブル終点駅露台 十五名出席

「飢餓線上の風流！空腹耐乏観月雅宴」

▽政府の貯蔵食糧は愈々涸渇し、主食の危機は益々深刻。米国輸入による罐詰品の配給が続き、米代替のみの耐乏生活は各家庭の台所を困窮させてゐる。文字通り何処も同じ秋寥々の惨状である。

▽折柄十三夜の月は皓々として海面に照り映え、眼下に見下す大阪神。夜の景観は実にパノラマを観る様である。戦時中、燈火管制の闇に馴れたくらい気持ち、久し振りに拭はれた感じがする。

・十月二十日 元公会堂別館 二十名出席

「天高く人馬瘦せたる秋、豊穰を讀ぶ」座談会」

▽天候に恵まれた稲作は近来にない豊作。十一月からは増配が出来るゾと、政府当局の御宣託もあつて、永い間の憂鬱から開放された想ひで稍や秋眉を開いた型。讀へんかな稔りの秋！

▽而し、何んと云つても十一月中旬までは切り抜けて行かねばならぬ。心身共に疲れた国民の食生活も、茲まだ暫らくは苦境のドン底を歩まねばならぬ。天高くして正に人馬瘦せたる秋である。

・十一月十七日 石屋川上流の一王山十善寺 二十名出席

「突破せり三食糧危機 錦繡の秋を探る」

▽十一月に入って国内は俄然活気づいて来た。ヤレ復興祭だ。新憲法公布だ。国民体育大会だ。芸能祭だと、騒ぎは仲々に賑やかだ。

▽国民大衆は花より団子。愈々中旬より二合一勺の久方振りに弁当携帯で紅葉の秋を探らうと洒落れてみた。

・十二月十八日 今井贊之助宅（尼崎市西字異開）十八名

「忘年顔見合せ会」

▽戦災者の失意。復員者の失望は未だ癒えない。かてて加へて住宅難、失業難、食糧難、物価高、何もかも、もみくちゃにされた日本の歳末である。

(4) 戦前の西宮雅楽多宗の宗員については、宝物展覧会記念写真（筆者所蔵）の折に付けた胸番号札から、宗員番号の一部が読み取れる（前稿「西宮雅楽多宗」の人々（一）戦前編―趣味人ネットワークの成立・展開―参照）。死没、転宅などで脱会者も出てくるので、宗員や宗員番号に異動が生じる。また、戦前の山号と寺号については、第二回栞交歓会（昭和六年七月十五日）と第三回栞交歓会（昭和七年七月十七日）の製作葉に記されているものがあるので、それらから一部が判明している。

①第二回栞交歓会（昭和六年七月十五日）製作葉

第一番 虎菟山 高山寺 高山岩三郎

第二番 富具山 通持寺 音馬福蔵

第三番 活惚山 甘茶寺 浅田耕一郎（柳一）

第六番 義應山 阿爪寺 □

第八番 かちかち山 泥舟寺 八馬壽男

第十八番 松壽山 絹宝寺 松井如松

第三十三番 燐王山 来福寺 宮本圓心

② 第三回栞交歓会(昭和七年七月十七日) 製作栞

第一番 虎窟山 高山寺 高山岩三郎

第三番 活惚山 甘茶寺 浅田耕一郎(柳一)

第八番 かちかち山 泥舟寺 八馬壽男

第十八番 松壽山 絹宝寺 松井如松

第三十三番 燐王山 来福寺 宮本圓心

③ 筆者所蔵写真(昭和七年頃)

第十二番 奇陶山 阿弥寺 中川黙音

戦後の宗員と宗番については、次のような二種の資料がある。また、創立時からの宗員の多くは、それらの物故者リストに入っていると思われる。

④ 『記録』に記された、昭和二十一年度の入宗者と除名者は次の通りである。

・入宗者

一月：杉本丙午樓 五月：野田映一 六月：小林好燐 七月：松尾晚翠・石原棲史・藤井誠(千菟庵) 八月：

難波正覚・今井賛之助 九月：阪口淳(砂山) 十月：長尾善三・小田龍二・國府鉄蔵 十一月：板橋誠一・上

月敬峯 十二月：丸山拓蔵

・除名者

六月：岡田種蔵・石田利一・山本魚石・米谷椒魚庵(戦後最初の一月のみ出席)・牧壽太郎(金逸)

『記録』には毎月の宗員来会者(出席者)の氏名を宗番順に記述している。昭和二十一年に入宗した十五人は、欠番者の位置に新たに入っていた。昭和二十一年末の宗員二十七人を宗番順に並べると、次のようになる。この時点ではまだ欠員がある。「西宮雅楽多宗三十三所寺号録」(昭和二十三年十月)を参考にして宗番を推定した。國府

鉄蔵・野田映一・上月敬峯は昭和二十三年十月時点では、すでに退会している。

高山岩三郎（第一番）・音馬福蔵（第二番）・浅田耕一郎（第三番）・矢野倉造（第四番）・多喜幸三郎（第五番）・小田龍三（第六番）・國府鉄蔵（第七番）・長尾善三（第八番）・勝部正造（第十番）・石原栖史（第十一番）・中川黙介（第十二番）・井上三千雄（第十三～十六番?）・丸山松蔵（第十三番?）・小林好燐（第十七番）・野田映一（第十八番?）・藤井誠（第十八番?）・永井清司（第十九番）・辻繁（第二十番）・杉本丙午樓（第二十一番）・松房晚翠（第二十二番）・板橋誠一（第二十三番）・難波正覚（第二十四番）・今井贊之助（第二十七番）・阪口淳（第三十番）・上月敬峯（第三十一番）・中川京二（第三十二番）・宮本円心（第三十三番）。

浅田耕一郎は西宮に限定しては雅楽多宗はじり貧になると考え、いわば「阪神」雅楽多宗への脱皮を図った。昭和二十一年十一月に二紙に投稿して趣味家の参加を募った。「ガラクタ宗とは」（『神戸新聞』十一月五日）と、コラム「阪神短波」（『日本輿論新聞』十一月八日）の切り抜き記事を、『記録』の四十四・四十五頁に挟んで残し、同頁に投稿の意図を次のように記している。

◎最近の社会生活は暗い面ばかりがクローズアップされてゐる。敗戦といふ現実に打ちのめされた日本人の心の中は、神を失ひ、物資のみに心を奪われてゐる者が余りにも多い。人間はパンも必要であるが、それよりもパンを目の前にした時の心の持ち方が必要なのではあるまいか。

◎今、立ち上らうとしてゐる日本に、心を潤ほす何ものかが忘れられてゐる。窮乏のどん底で拾ひ上げた「心の糧」。それがどんなに美しいものか。宗員同志のみが味はへる楽しさである。雅楽多宗再建の意義も此処にある。この機会に広く阪神間の好事家に呼びかけて入宗者を募らうと、左の如くに新聞記事を掲載した。

⑤「物故宗員」（西宮雅楽多宗三十三所寺号録 昭和二十三年十月）

木村幽名 八馬壽男 永井長兵衛 小林康治 松井如松 藤井治三郎 牧壽太郎

喜田新介 川西空彌 橘彌三郎 井上三千雄 板橋誠一

⑥「物故宗員彼岸大法要修行」（昭和二十五年三月十九日）

木村幽名 八馬壽男 永井長兵衛 小林康治 松井如松 藤井治三郎 川西空彌

中島秋月 牧壽太郎 喜田新介 橘彌三郎 井上三千雄 板橋誠一

※⑥には中島秋月が追加されている。

⑦戦後の宗員一覧については、次の三種の資料から、その時点での宗員が判明する。

・「西宮雅樂多宗三十三所寺号録」(昭和二十三年十月) ※住所省略

第一番	夷菟山	高山寺	高山岩三郎	戎さんに関するもの
第二番	富具山	通持寺	音馬福蔵	古銭
第三番	活惚山	甘茶寺	浅田柳一	燕に因んだもの、木版紙屑
第四番	出鱈目山	漫画寺	矢野蔵造	漫画、絵画、納経印
第五番	恵美詩山 ^{A,B,C}	舞理雅寺	多喜幸三郎	矢たて、宝舟
第六番	逃世山	一壺寺	小田龍三	俳句に関するもの
第七番	変天古山	似顔寺	小松原無庵	あらゆる趣味品
第八番	童楽山	玩虎寺	長尾善三	虎に関するもの、木版絵葉書
第九番	蛸壺山	大漁寺	松井晩聲	切手、煙管、矢たて、古銭
第十番	吉符山	加葉寺	勝部正造	乗車券
第十一番	糸瓜山	無羅林寺	石原栖史	切手類
第十二番	自蔵山	子守寺	中川黙音	子供に因むもの
第十三番	米俵山	美穀寺	丸山松蔵	趣味品一式何でも来い
第十四番	花野山	娛久楽寺	西田一光	馬、極楽味に因んだ趣味品
第十五番	大江山	鬼返寺	細田閑光	大仏玩具、趣味の紙屑
第十六番	遊名山	好燐寺	小林好燐	えはがき、燐票
第十七番	鶴々山	禿頭寺	武村光起	土器、版画、紙屑一式
第十八番	美奈山	娛存寺	藤井千鼠庵	鼠に関するもの
第十九番	毛納香山	買俄寺	永井清司	自筆の絵画、手拭、鏡、鈴
第二十番	鈍繰山	整較寺	辻 繁	諸国名物レットル
第二十一番	笑夷山	罹災寺	杉本丙午樓	趣味品一切
第二十二番	壽多運賦山	雅葉寺	松房晩翠	郵趣品、木版類、スタンプ

第二十三番	阿呆山	底無寺	安部四郎	げてもの、おもちゃ
第二十四番	小槌山	甲子寺	難波正覚	大黒天、古銭
第二十五番	香西山	瑞宝寺	頭井豊樹	土鈴、趣味品一切
第二十六番	福壽山	菟宝寺	葛山磐次	屑と反古類一式
第二十七番	武庫山	山人寺	今井賛之助	趣味品なら何でも
第二十八番	大屯山	蓬左寺	服部衣山人	郵趣品、新聞題字、煙草関係
第二十九番	於登山	吞喜寺	得永幸作	切手類
第三十番	打出山	木槌寺	阪口砂山	諸国陶磁器、土鈴
第三十一番	四月山	十九庵	金井孫一郎	囲碁と俳句、常磐津
第三十二番	菟箸山	延京寺	中川京二	絵馬、箸、土鈴
第三十三番	燐王山	來福寺	宮本圓心	土鈴、記念メダル、燐票
・「雅樂多宗三十三所めぐり」(第十回宝物展覧会) 出品目録 (昭和二十四年二月十一日)				
第一番	御喜源山	四葉楽寺	高山岩三郎	戎さん
第二番	富具山	通持寺	音馬福蔵	大型土器
第三番	活惚山	甘茶寺	浅田柳一	戦災瓦
第四番	出鱈目山	漫画寺	矢野蔵造	菟印帳
第五番	笑夷山	罹災寺	杉本丙午樓	宝船
第六番	那無山	思尊寺	葛山磐次	十二支年賀状
第七番	変天古山	似顔寺	小松原無庵	美人画
第八番	童楽山	玩虎寺	長尾善三	張古の虎
第九番	阿呆山	底無寺	安部四郎	羽子板
第十番	吉符山	加葉寺	勝部正造	記念乗車券
第十一番	糸瓜山	無羅林寺	石原栖史	鳥瞰図
第十二番	自蔵山	子守寺	中川黙音	神札

第十三番	米俵山	美穀寺	丸山松蔵	郷土玩具
第十四番	花野山	娛久楽寺	西田一光	絵馬
第十五番	大江山	鬼退寺	細田閑光	記念メタル
第十六番	遊名山	好燐寺	小林好燐	燐票
第十七番	釋金山	端羅漢寺	難波正寛	三十三所のもの
第十八番	菟箸山	延京寺	中川京二	箸
第十九番	毛納香山	買俄寺	永井清司	趣味手拭
第二十番	家庭山	円満寺	今井賛之助	盃と杯合
第二十一番	喜楽山	頓保寺	金井孫一郎	大人のおもちや
第二十二番	壽多運賦山	雅葉寺	松房晚翠	戦災変色切手
第二十三番	鶴々山	禿頭寺	武村光起	こけし
第二十四番	逃世山	一壺寺	小田龍三	俳句のもの
第二十五番	末の松山 ^{A B C}	波古タスク寺	頭系予期	旅の小冊子
第二十六番	恵美詩山	舞理雅寺	多喜幸三郎	煙管
第二十七番	鈍繰山	整較寺	辻 繁	記念木杯
第二十八番	大屯山	蓬左寺	服部衣山人	新聞題字
第二十九番	於登山	吞喜寺	得永幸作	たばこと創刊号
第三十番	打出山	木槌寺	阪口砂山	諸国陶器
第三十一番	蝸壺山	大漁寺	松井晚聲	矢立
第三十二番	美奈山	娛存寺	藤井千鼠庵	ききの大黒
第三十三番	燐王山	來福寺	宮本圓心	趣味の土鈴
特別出品			阿部四郎	げてもの

・「納経実印完成押捺会」(昭和二十六年五月二十日)

第一番	自蔵山	子守寺	中川黙音
第二番	富具山	通持寺	音馬福蔵
第三番	活惚山	甘茶寺	浅田柳一
第四番	出鱈目山	漫画寺	矢野蔵造
第五番	恵美詩山 ^{A B C}	舞理雅寺	多喜幸三郎
第六番	大丈山	安楽寺	□
第七番	御喜源山	四葉楽寺	高山岩三郎
第八番	童楽山	玩虎寺	長尾善三
第九番	□□山	漫画寺	□
第十番	吉符山	加葉寺	勝部正造
第十一番	糸瓜山	無羅林寺	石原栖史
第十二番	自蔵山	子守寺	中川黙音
第十三番	米俵山	美穀寺	丸山松蔵
第十四番	花野山	娛久楽寺	西田一光
第十五番	大江山	鬼退寺	細田関光
第十六番	遊名山	好燐寺	小林好燐
第十七番	鶴々山	禿頭	武村光起
第十八番	美奈山	娛存寺	藤井千鼠庵
第十九番	毛納香山	買俄寺	永井清司
第二十番	鈍繰山	整較寺	辻 繁
第二十一番	笑夷山	罹災寺	杉本丙午樓
第二十二番	壽多運賦山	雅葉寺	松房晚翠
第二十三番	阿呆山	底無寺	安部四郎

第二十四番	蛙鳴山	河鹿寺	□
第二十五番	末野松山	浪古佐寺	頭井豊樹
第二十六番	那無山	思尊寺	葛山磐次
第二十七番	武庫山	山人寺	今井賛之助
第二十八番	麓光山	菟楽寺	□
第二十九番	於登山	吞喜寺	得永幸作
第三十番	打出山	木植寺	阪口砂山
第三十一番	蛸壺山	大漁寺	松井晩聲
第三十二番	菟箸山	延京寺	中川京二
第三十三番	燐王山	來福寺	宮本圓心

※本稿【写真5】【写真16】【写真18】は筆者所蔵、他は西宮笹部桜コレクション（白鹿記念酒造博物館寄託）。